



大森亜起子氏

スー氏から報告がありました。虐待のサイクルは、動物虐待、家庭内暴力、そして人間への暴力と一連の関係性があることはすでに知られていますが、こうした関連を人間と動物、自然環境が全て相互に関係していることを認識し、それを知ることによって自己を見つめ直す切っ掛けとなり、暴力的な行動を抑制する効果があることが示されました。



中塚圭子氏

また、奈良県が、地域振興という位置付けで、人と動物との関わりを考えることによって豊かな心を育てるヒューメイン・エデュケーションを実施する「奈良県のいのちの教育プ

ログラム」とその評価に関する報告がありました。いのちの教育プログラムの普及支援事業の一環として希望する自治体に教育ツールの提供が行なわれたこともあり、東京の八王子市で実施をしている動物愛護推進員の方からも関東での実施効果について言及があり、同プログラムの普及も着実に進んで来ているようです。

バン格拉デシュからは、狂犬病の予防に対する認識が十分でないことによる発病のリスクが国内全体でまだ高く、街中にも野良犬と呼ばれる飼い主のいない犬が多数ウロウロしています。こうした被害に遭うのは、多くの場合は子どもたちですが、それらの被害は今後の教育と動物の福祉向上の取り組みによって改善できるリスクだという報告が行われました。

最後に、日本国内に多数存在する犬にまつわる伝説を読み解き、古来より日本に存在した犬との共生の在り方を紹介する発表が行なわれました。弘法大師を高野山へと導いた白犬と黒犬の物語を例にあげ、犬の習性を尊重した日本ならではの犬との付き合い方が紹介されました。

地域毎に抱えている問題や取り組んでいる内容も違っていますが、どの地域においても動物や自然とより良いかたちで共生するためには子どもたちを正しく教育し、地域の人々に啓発を行なっていくことが必要不可欠であると強く感じました。

シンポジウム 4

「地域を幸せにする伴侶動物飼育支援システム
— 伴侶（家庭）動物との暮らしを地域活性へ」

7月20日 14:00~17:00 / 会場：コンベンションホール



左：座長 細井戸大成氏 / 右：モデレーター 富永佳与子氏

神戸市動物管理センターでは、高齢者を中心とする飼い主からの死亡・入院による引き取り割合が増加しており、



懸上忠寿氏

その内の75%は入院であることから、この高齢者・単身者への支援があれば、「持ち込まれる命ゼロ」に繋がるという課題に対し、人間の医療面で進められている地域包括ケアシステムに動物に関わる人々や組織を組み込むという ICAC KOBE 2014 での提案を引き継ぎ、開催されたシンポジウムです。



西澤亮治氏

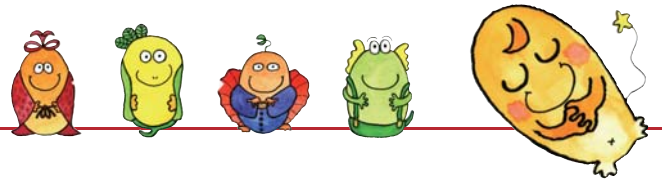
ペットと暮らすことは、高齢者の生活に良い影響を及ぼすことが報告される一方で、ペットを飼いたいけれど自身の年齢や体力を考慮し、ペットを飼わないという選択をする高齢者が多いことも明らかになりました。超高齢化社会を迎えた我が国で、心身共に豊かで安心して生活ができる社会にするためにはどうすれば良いのでしょうか。こうした背景を踏まえ、いのちが共生する優しく温かな社会の構築について、行政、獣医師、民間企業、そして社会福祉



森川功一氏

制度についての専門家にご発表を頂き、活発な意見交換が行なわれました。

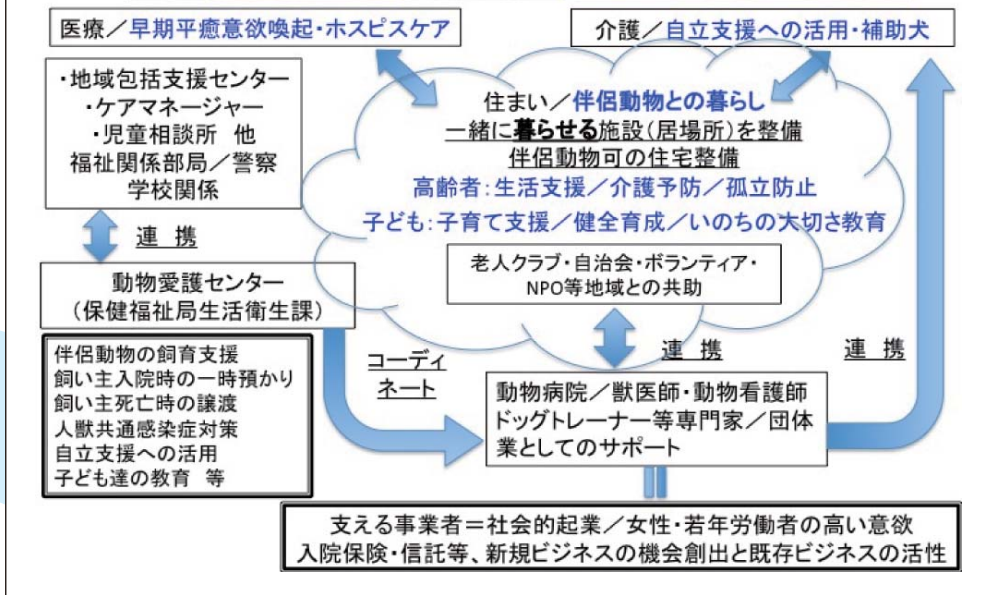
ペットは愛玩動物から家族の一員へ、さらに社会の一員としてその位置づけが変化してきました。そしてそれに伴い、行政や動物病院を中心とする動物に関わる人達には、社会の中で高齢者や子どもとの関わりをコーディネートし、豊かな地域コミュニティの再構築に貢献するという、重要な役割が求められるようになって来ました。それを表現し



伴侶動物との暮らしから見る地域支援策全体図(案)

* ICAC KOBE 2014 シンポジウム4より作成

地域に「伴侶動物との暮らし」を取り入れる=いのちが共生する優しく温かな社会



たものが、上の図です。地域包括ケアシステムとは、「ニーズに応じた住宅が提供されることを基本とした上で、生活上の安全・安心・健康を確保する為に、医療や介護のみならず、福祉サービスを含めた様々な生活支援サービスが、日常生活の場で適切に提供できる様な地域での体制」のことです。

高齢者施設でも少しずつですが、飼育していたペットと入居できる事例も出て来ており、地域包括ケアシステムの中で、高齢者の飼育継続に具体的にどのように支援の仕組みを整えていくかが、課題となります。良いモデルが出来れば、普及も進むことでしょう。家族の一員としてペットを考える保険会社では、付帯サービスにペットの24時間電話医療相談サービスが設定されていますが、今後は、飼い主の危機に際してのペットの保護への備えも飼い主の責任として考えておく必要があるのかもしれない。



上杉 克氏



松原一郎氏

高齢飼い主の意識調査の中で、高齢の飼い主は、ペット飼育が自分の健康に役立つと他の世代より強く感じており、ペットを飼っている高齢の飼い主は、一般的な高齢者に比べ、日常生活に満足している人が35.4%（一般12.0%）、まあ満足を入れると92.5%が満足しており、ほとんど不満のある人がいません。普段の生活で楽しいことは、ペットと過ごすこと87.4%（一般では、テレビ・ラジオが83.2%/複数回答）とペットとの日常生活の満足度が大変高いという調査結果が報告されました。ペッ

トと見つめ合うと飼い主のオキシトシンが上がるという論文も発表されており、生き物としてのヒトに、ペットとの暮らしは、その生活の質を高めるためにも必要なのではないのでしょうか。大阪市獣医師会では、高齢者に子猫のミルクボランティア（授乳の必要な子犬・猫を飼育し、飼育可能な人へ譲渡していく取組み）をお願いして、高齢者が、少しでも動物や社会と接点を持つことのできる試みを始めようとされています。

神戸市は、地域包括支援センター（概ね中学校区一カ所）に独自の「見守り推進員」を置いています。阪神・淡路大震災の復興住宅の高齢者支援から孤独

死対策と繋がっているもので、その先にある社会からの無縁化する人々を放置しない（社会的包摂）も求められています。これからは、所謂監視的なものではなく、緩やかな見守りというのが理想です。その実施に置いて、動物が関わることは、豊かなコミュニティの構築に、一定の役割を果たせるように思いますし、動物管理センターの課題ともリンクします。高齢者の状況も個々人で違っており、基調シンポジウムにあった祖母脳の話も考え合わせれば、支援されるばかりではなく、子ども達の見守りや孤立する保護者への子育て支援等、多くの役割を期待されることでしょう。中学校区という顔の見える範囲のコミュニティの再構築は、まさに阪神・淡路大震災の経験を未来に繋げる大きな可能性を感じさせる取組みであり、市民ひとりひとりの幸せな在り方に付いて社会が協働出来る場が提供される可能性を感じました。

